

< 2016年10月 >

古賀 順子

アムステルダム

週末を利用して、アムステルダムへ行きました。パリ北駅から列車タリス(Thalys)に乗って3時間20分。ベルギーを横断し、平らな風景を見慣れた頃にアムステルダム中央駅に到着します。水路の街アムステルダム。扇状に張り巡らされた水路は、全長100kmを超え、1,500以上の橋が架かり、橋と同じ数の水上船生活者がいるそうです。オランダ黄金時代17世紀に水路工事が完成し、世界有数の画期的な都市計画の例として、今日なお重要な役目を果たしています。

中央駅を降りてまず気付いたのは、路上生活者がいないこと。パリでは、地下鉄、駅、街角など、至る所で浮浪者や宿のない移民の姿が目立ちます。フランス北部カレー市には「ジャングル」と呼ばれる移民収容地があり、治安や衛生状態が悪く、取り壊しが行われたばかりです。夏に旅行したミラノでも、駅周辺にたむろする浮浪者は増える一方でした。増え続ける移民受入れに苦慮するフランスやイタリアとは対照的な光景に驚きを感じ、オランダはどのような移民政策を進めているのだろうかと思えます。自動車より tram やバスが優先され、自転車通勤・通学ができるアムステルダム市民には、パリ市民のような人間不信感がありません。個人の生活を大切にしながら、他者を許容する国民性を感じます。

人口1,700万人のオランダ。首都アムステルダムに人口が集中しないよう、上手に役割分担をしています。84万人が住むアムステルダムから列車で30分、第4位の都市ユトレヒト(34万人)は、中世から栄えた学生の街。第2位のロッテルダムは、港湾工業の街。アムステルダムから列車で50分のデン・ハーグ(52万人)は第3位の都市で、1625年「戦争と平和の法」著者で「国際法の父」フーゴ・グロテウス(1583-1645)に象徴される司法の街。家電メーカーとして有名なフィリップスが本社を置くアイントフォーヘン(22万人)

が第5位。九州とほぼ同じ面積のオランダですが、農産物・食料品においては、ドイツ・フランスを上回るヨーロッパ最大の輸出国です。

また、今日の宗教分布は、カトリック(30%)、プロテスタント(20%)、イスラム教(6%)、無宗教(45%)。数字からも分かるように、宗教が大きな社会問題になり難い国です。1598年アンリ4世が「ナントの勅令」を出すまで、フランスの裕福なプロテスタント層の多くは、オランダに逃れています。

日本人受け入れも寛容で、4年制の学校であれば初回から4年間のビザ、労働ビザも雇用契約期間を通して発行、一年毎に様々な書類を用意しなければビザ更新が出来ないフランスではとても考えられないことです。17世紀以来、諸外国との貿易に優れたオランダ人は、オランダ語以外に、英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語など、3・4ヶ国語を話すのが当たり前。外国人を上手に受け入れつつ、進んで海外に目を向け、自国の発展を成し遂げる、何世紀にも亘って受け継がれてきた儉約と合理性に基づくビジネス感覚が身に付いているように思えます。

1602年、世界初の株式会社「オランダ東インド会社」が設立され、海洋大国として裕福な市民層が増えると、それを記録すべく、17世紀オランダ絵画も黄金時代を迎えます。三大画家と呼ばれるのは、肖像画に大きな変革をもたらしたフランス・ハルス(1582-1666)、「夜警」で知られるレンブラント(1606-1669)、そして19世紀フランス人芸術評論家テオフィル・トレ=ビュルジェ(Theophile Thoré-Burger)によって再評価されたフェルメール(1632-1675)。そこに描かれた当時の風景、建物、室内、人物、衣装を通して、活気に溢れた富裕市民層の台頭を知ることができます。

現在34点だけがフェルメール作と認められ、「真珠の耳飾りの少女、または青いターバンの少女」と向かい合って掛けられている「デルフト風景」(1660)(デン・ハーグのマウリッツハイス美術館)の空と雲、水面に映る建物の陰、その光は、350年を過ぎても見る人を引き込む不思議な力を秘めています。